

一三五番

つのさはふ 石見の海の 言さへく 辛の崎なる いく  
 りにそ 深海松生ふる 荒磯にそ 玉藻は生ふる 玉藻  
 なす なびき寝し児を 深海松の 深めて思へど さ寝  
 し夜は いくだもあらず 延ふつたの 別れし来れば  
 肝向かふ 心を痛み 思ひつつ かへりみすれど 大舟  
 の 渡の山の 黄葉の 散りのまがひに 妹が袖 さや  
 にも見えず 妻ごもる 屋上の山の 雲間より 渡らふ  
 月の 惜しけども 隠らひ来れば 天伝ふ 入日さしぬ  
 れ ますらをと 思へる我も しきたへの 衣の袖は  
 通りて濡れぬ

反歌二首

一三六番

青駒が 足がきを速み 雲居にそ 妹があたりを 過ぎ  
 て来にける

一三七番

秋山に 落つる黄葉 しましくは な散りまがひそ 妹  
 があたり見む